

「凡夫の身の自覚」

第15組長敬寺住職 千葉 謙

浄土真宗の教えの中で、「凡夫」という言葉が出てきますが、どう解釈しているのでしょうか。

一般的に使われているよく似た言葉に「凡人」という言葉がありますが、その意味を辞書で引くと、「特に優れたところのない、普通の人」となっています。

「凡夫」も同じように解釈をしている感があるのですが、親鸞聖人は、その凡夫に付け加えて「煩惱具足の凡夫」と使われています。

これは「煩惱がそなわって足りないものがないのが凡夫」という意味ですが、そうすると「凡人」とは意味が異なってまいります。

つまり、言い換えれば「凡夫」というのは、「人として優れた所があるもないも、身を煩うことも、心を悩ますことも、苦しまねばならないことも、ひとたび私の身に訪れたことは、私の身の真実であり、事実であるから、そのことをきちんと受け取って生きていける人」を「凡夫」と言うのでしょうか。

生きるということの事実を、この身は確かに受け取っていますが、それを邪魔するのが、「煩惱は避けたいし、苦しみたくない」という自我意識です。

郡上市白鳥町の齋場に

「善いことばかりが恵みではなく、苦難、困難もまた恵みなり」という言葉が一時期掲げてありました。よく似た言葉に、念仏者、木村無相さんの

「ご縁、ご縁、みなご縁、困ったこともみなご縁、南無阿弥陀物仏に遇うご縁」という言葉があります。私達は、自分の都合に合うことと、合わないことで分けて、ご縁（恵み）を大切にしたり、しなかったりということがありますが、南無阿弥陀仏という教えは、都合に合うが合わまいが、ひとたび私が出会ったことは、苦難だろうが、困難だろうが、紛れもなく私の身の事実であるから、きちんと引き受けて生きていけることが大切なことであるし、そのことは、「凡夫」という身の上の自覚であり、わが身を人間として本当に生き、空しくなく生きていけるというところにつながっていくのではないのでしょうか。

「凡夫」とは人間を生きることの「真実性」に目覚めた人のことです。